

## 日本人の若者における宗教観

### ―群馬大学で行ったアンケート調査とその結果―

所属（教育学部・日研生） 名前（バルテッローニ・フラヴィア）

はじめに

日本の宗教は、イタリアと異なり、一つに限らない。イタリアの場合、もっとも広がっている宗教はやはりキリスト教（カトリック）である。確かに、イスラム教や仏教など他の宗教を信仰している人は少なくないが、大部分のイタリア人はカトリックを信仰している。また、カトリックは歴史や伝統文化の視点からイタリア人のナショナルアイデンティティに大きな影響を与えているといっても過言ではない。一方、日本では宗教は一つに限らず、仏教や神道、キリスト教、新宗教まで、様々で、同時に信仰されていることも珍しくない。例えば、結婚式は神道、葬式は仏教という考え方が広がっている。こうした宗教の間にある矛盾を越える神仏習合（シンクレティズム）は日本宗教の特徴である。

しかし、日本人の若者がその状態にどのように取り組むのかは明らかではない。若者はきちんと神道と仏教のことが理解し、区別できるのか。また、どのような宗教観を持っているのか。

そこで、本稿では日本人の若者の宗教観を検討したい。例として群馬大学での調査結果を分析する。

第一に、現在の日本宗教の状況を説明する。第二に、群馬大学で実施したアンケート調査の結果を分析し、総務省のアンケートを比較する。第三に、なぜこのような結果が出たかを検討してみたい。

#### 第一章 現在の日本宗教の状況

イタリアは宗教が一つに限っているという強いイメージを持っている国である。実際に、もっとも広がっている宗教はやはりキリスト教（カトリック）である。確かに、イスラム教や仏教など他の宗教を信仰している人は少ないと言えないが、大部分のイタリア人はカトリックを信仰している。また、カトリックは歴史や伝統文化の視点からイタリア人のナショナルアイデンティティの形式に大きな影響を与えているといっても過言ではない。

カトリックは一神教であるキリスト教の一つで、哲学的な考えが特徴だ。そして、ナショナルアイデンティティと強く結びつけられているので、戦争の元になったこともあった。しかし、日本の場合、どうだろうか。日本の宗教というのはどのような宗教なのか。また、日本宗教のユニークな特徴は何なのか。

そこで、エアハート（1994）と Ellwood（2008）の文献や文化庁文化庁宗務課の「宗教統計調査」（2012）を参照しながら、日本宗教の特徴について整理する。第一章では順番に神道、仏教、その他（キリスト教と新宗教）の特徴について検討し、最後に自分の意見を述べたい。

## 第一節 神道

神道は先史時代の日本の信仰や慣行に由来しており、日本のもっとも古い宗教である。文字通りに、神道という言葉は「多くの神の道」という意味だ。しかし、神というのは何だろうか。神と自然や自然現象（雷、風、山など）を同一視する人は多いだろうが、実は、祖霊も怨念を残して死んだ人も神道の神として信仰されているのだ。天皇も、天照の大御神の子孫として、第二次世界大戦のころまで崇拝されていた。

だが、元々の神道は農作業サイクルに関連する儀式から生まれ、季節の祭礼の形式をとる。今日も恵みを祈り感謝を捧げる祭りは残り、神道の一つの特徴だと言われる。農耕に関する儀礼と言えば、稲荷という（女）神が頭に浮かんでくるだろう。稲荷神は名前通りに穀物（稲）と水田の神で、神使の白い狐と結び付けて考えられている。稲荷神は春が来ると山から下りて田の神として人間の農耕を手伝うが、冬になったらもう一度山に戻る。もちろん、このような循環が農作業サイクルと同じだということは言うまでもない。稲荷神は本来の農業の神でなく、産業全般の神として現在も信仰されている。ビジネス街に小さい稲荷神社を見ることも珍しくない。

神道には確定した教祖、創始者がおらず、キリスト教の聖書やイスラム教のコーランにあたるような公式に定められた「正典」も存在しないが、『古事記』（712年）や『日本書紀』（720年）などといった「神典」と称される古典群が神道の聖典とされている。しかし、神道には複雑な教義や抽象的な哲学があまりなく、それよりも自然に対して素直に感謝することや祭りに参加することの方が大切だとされている。つまり、考えるより実際にやるのが神道の一つの要素だといえる。

もう一つの重要な特徴は神聖（清浄で汚れない）と日常の事柄や事物、つまり、清めと穢れの区別である。神の屋敷としての神社や祭りの時間、鳥居のあるところなどは神聖で、その場所や時間に入るとしたら、清潔にしなければならない。例えば、神と接触するために神社に入るとき、水で日常的な穢れから口や手を清める必要がある。その理由から、奈良時代まで天皇の死亡後で、都を別の場所に移動しなければならなかった。

現在の日本では、もっとも盛んな儀礼はやはり結婚式だ。明治神宮に行ったら神道の結

婚式を見ることのできる可能性が高い。それが分かっている、伝統的な結婚式の写真を撮っている外国の観光客の姿を見かけることも珍しくない。このような結婚式は日本人にも外国人にも人気があると言えよう。結婚式以外に、お守りを買うことや特別な時にお参りをすることも普及している。

文化庁文化部宗務課の「宗教統計調査」(2012)によると、日本国内で神社は8万1千で、信者数は約1億人である。

神道はキリスト教と非常に相違した宗教だと分かる。この比較から三つの珍しくて興味深い点を見つけた。まず、他の先進国と違い、日本だけに多神教が残っているというところだ。次に、海外では、日本は都会の多い、「ハイテク」国というイメージを持たれているが、実は、神道によって自然と強く結ばれていると言えることだ。最後に、西洋の宗教と異なって、神道には哲学・抽象的な考え方があまりなく、それよりも実際に儀礼を行うことが重要だという点だ。

## 第二節 仏教

仏教はインドで始まり、中国と朝鮮を経て6世紀に日本に伝来した宗教である。そのころからずっと神道と混淆して一つの宗教体系として再構成されてきた。つまり、いわゆる神仏習合である。神仏習合とは、神道と仏教の相違点(例えば、神道は地縁・血縁などで結ばれた共同体を守ることを目的に信仰されてきたが、仏教は主に個人の安心立命や魂の救済を求める目的で信仰されてきたという違い)を越えて、二つの宗教を調和しながら同時に信仰するということである。

神仏習合の一つの例は神道の天照大神の場合だ。天照大神は皇室の祖神であり、日本国民の祖氏神とされるが、神仏習合のため真言宗で大日如来と同体として特別視されていた。上述のように神は仏、あるいは、神は人間と同じように苦しみから逃れることを願い仏の救済を求めることなど、様々に神と仏の同時の存在を釈明することは神仏習合思想の一つである。一方で、反対の神仏分離の傾向もあった。例えば、伊勢神宮のように早くから神仏が分離して、神のみが信仰された神社もあった。明治時代にも神仏分離が行われた結果、廃仏毀釈のため奈良時代から建立されていた神宮寺は被害を受けた。

日本仏教には様々な宗派がある。もっとも古い宗派は奈良仏教系(南都六宗)で、三論宗、法相宗、華嚴宗、律宗、俱舍宗、成実宗がここに所属している。平安二宗は真言宗と天台宗だが、天台宗から日蓮宗、浄土宗、浄土真宗が生じた。最後に曹洞宗、黄檗宗、臨済宗が禅の宗派として知られている。この宗派の教えはそれぞれ異なっているが、現在の日本仏教では、悟りよりも死者の葬儀や供養の儀礼で自分自身と先祖が安全に極楽へ行くことの方が重要だとされている(エアハート、1994:36-37)。日本国内で寺院はほぼ8万で、信者数は8千5百万人を超える(文化庁文化部宗務課、2012)。

日本宗教の一つの重要な特徴は上述どおり神仏習合である。仏教と神道が異なっている

のに、仏教と神道が同時に信仰されていることが珍しくない。つまり、西洋宗教と違い、信者が一つの宗教に排他的に所属することがあまりないのである。また、仏教にはたくさん宗派があるが、欧米のキリスト教の宗派と比べると、日本の仏教宗派の方はあまり競争がないとも言える。

### 第三節 その他

文化庁文化庁宗務課の調査から見ると、神道と仏教は日本のもっとも重要な宗教だが、1千1百万人の日本人は両宗教とは異なる別の宗教のメンバーである(文化庁文化庁宗務課、2012)。この宗教はキリスト教と新宗教だ。

キリスト教は16世紀に日本に伝来した。1549年にスペインのイエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルは来日し、日本人をキリスト教に回収させ始めた。しかし、17世紀に日本政府はキリスト教を禁止し、キリスト教徒を迫害した。鎖国時代が終わり、明治時代に入ったとたん、再び外国の文化や宗教が伝来した。今回はカトリックのみならず、プロテスタントも国に入ってきた。過去と現在の日本におけるキリスト教の特徴は、他の宗教の伝統とあまり混ざり合わなく、外国の伝統を維持する傾向があることだ。信者数は2百万人未満だ(文化庁文化庁宗務課、2012)。

新宗教は19・20世紀にカリスマ的な個人によって創設された宗教である。もっとも古い新宗教の中で天理教は有名だ。天理教は、江戸時代末に成立した新宗教で、中山みきという人を教祖とする宗教団体である。中山が息子の病気を治す儀礼に参加したとき、神は中山の体に入り、彼女を自分のメッセンジャーにしたと言われている。天理教の教えによると、「陽気ぐらし」のため、「ほこり」(貪欲や憎悪、怒りなどのような罪)から心を開放する必要がある。天理教の信者が天理王命という一人の神を信仰するので、天理教はキリスト教のような一神教だとされている。

しかし、もっとも普及している有名な新宗教は創価学会である。第二次世界大戦の直前に設立された創価学会は仏教の日蓮宗から生じたので、本当に新宗教かどうか疑問が残っているが、Ellwood (2008) とエアハート (1994) は創価学会が新宗教だという。創価学会の教えによれば、この教団の慣行に排他的に帰依する人は、法華経の力を信仰することによってすべての問題を解決することができる。

天理教と創価学会のほかに、教派神道の金光教や創価学会のような法華系の霊友会など様々な新宗教があり、精神世界や真言宗のような密教に関する、阿含宗やオウム真理教などの「新新宗教」も含めて新宗教は40派ぐらいである。この新宗教の共通点は、積極的に信者を求め、マスメディアを利用することや一神教への傾向が強いこと、あの世よりこの世の中の利益を求め、排他的に信仰することなどである(Ellwood, 2008: 209-210)。

ここまで書いたように、神道と仏教の信者と違い、キリスト教と新宗教の信者は他の宗教を信仰してはいけない。それは西洋宗教と全く同じだ。神仏習合の思想があまり好きで

はない、あるいは、一つの宗教だけを信仰したい日本人はキリスト教や新宗教のメンバーになるかもしれないと思う。

## 結び

第一章では日本宗教の特徴について考察した。その結果、日本宗教は非常に多様で、その中でも神仏習合が特徴だと分かった。確かに、西洋宗教のようにキリスト教や新宗教という一つの宗教を排他的に信仰している信者もいるが、一般的な日本人は同時に二つの異なっている宗教を信仰することが明らかになった。

## 第二章 アンケート調査

### 第一節 アンケート調査の紹介

若者はどのように第一章で述べた複雑な宗教状況を取り組むのか。この問を調査するために、アンケート調査を実施した。したがって、調査の目的は、群馬大学生は宗教観を持っているかどうか、また、どのような宗教観を持っているかを確かめることである。調査方法は、アンケート質問表紙の配布だった。選択肢を選んで答える調査なのだが、神道と仏教の違いについての質問だけには選択肢がなくて自由に答えなければならない。調査対象は、群馬大学生の31人である。荒牧キャンパスで行った調査なので、大部分の回答者は教育学部と社会情報学部の女性だった。アンケートは二つのパートに分かれている。第一パートには私が作った質問があるが、第二パートでは比較するために去年文化庁が行ったアンケートと同じ質問をした。第二節ではアンケートの第一パートの分析をするが、第三節では文化庁のアンケートと比較する。

### 第二節 調査の分析とその結果

アンケートの第一パートに6つの質問がある。これからそれぞれの質問を紹介し、分析する。最後に、アンケートについての意見や感想を書いて下さいという問12の回答についても述べる。

#### 問1 宗教を信じるか

問1に二つの質問がある。一番目は自分の持っている宗教についてだ。「信じている宗教がありますか。」という質問に対して、たいていの回答者は「ない」と答えたが、一人だけは「持っている」と言った。やはり日本人の若者が宗教に興味がありませんと分かったの

で、このような回答は予測することができた。しかし、二番目の質問に対する回答は予想しなかった。なぜかという、「あなたが信仰している宗教も含めて、親しみを感ずる宗教はどれですか。」と聞いたら、一番の答えは想像通り仏教だが、二番目はキリスト教だったからだ。三番目は「なし」、あるいは、何も書いてないグループだった。神道は日本で生まれた宗教にもかかわらず、最後に来る。日本人の若者は神道よりキリスト教の方に興味をもっているようだ。それはなぜだろうか。実は、キリスト教といえばクリスマスや洋式の結婚式というような人気のあるイベントが心に浮かぶ日本人は多いと思われる。つまり、キリスト教は欧米の宗教としてこそ、日本人の好きな欧米文化の代表になるのだ。一方で、神道が日本で生まれた宗教で国家神道として第二次世界大戦のころに関連付ける人もいるからこそ、現在の若者は神道にほとんど興味を持っていないのではないだろうか。

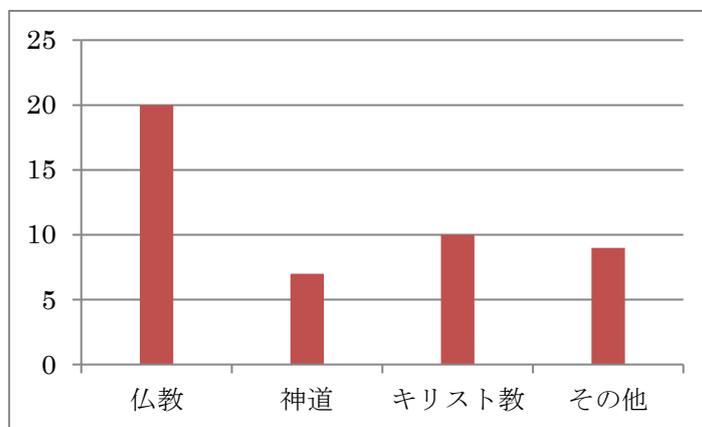


図1 問1-B「あなたが信仰している宗教も含めて、親しみを感ずる宗教はどれですか。」の答え  
(その他：何も書いていない/なし)【多肢選択法】

### 問2 宗教について教えてもらったことがあるか

「特定の宗教について何か教えてもらったことがありますか。」と聞いてみたが、三分の二は「ない」と答えた。そして、「ある」と答えた人に具体的に何をと聞いてみると、三人は「分からない、覚えていない」と答えたので、本当に教えてもらったかどうか明らかではない。ほかの三人は仏教について教えてもらったという回答をした。その中の一人は具体的に「日蓮宗について」と答えた。興味深いのは、二人が「宗教を否定しちゃだめ」と「宗教の話を外部でするのはよくない」という回答をしたことだ。それは、宗教についてではなく、宗教に関するマナーについての答えだ。この問2から分かることというと、学校や家族の中で一般的な若者が宗教について何も教えてくれないことのみならず、両親が子供に何も教えてあげないので両親も宗教にあまり興味を持っていないことも理解できる。

### 問3 神道のイメージについて

この質問では神道のイメージについて聞いてみた。答えるとき、いくつかの選択肢を選

ぶことができる質問だ。一番は思ったように神社だった。「神道」と「神社」は文字だけ見ると「神道」という言葉が分からなくても何か関係があるのがすぐ分かるので、当たり前前の答えだと思う。驚いたのは、二番目の答え、「なし」だ。神道はあまり知られていないと思った。結婚式のイメージも若者の中でそれほど強くないようだ。その答えから見ると、若者は神道のことがあまり理解できないのではないか。

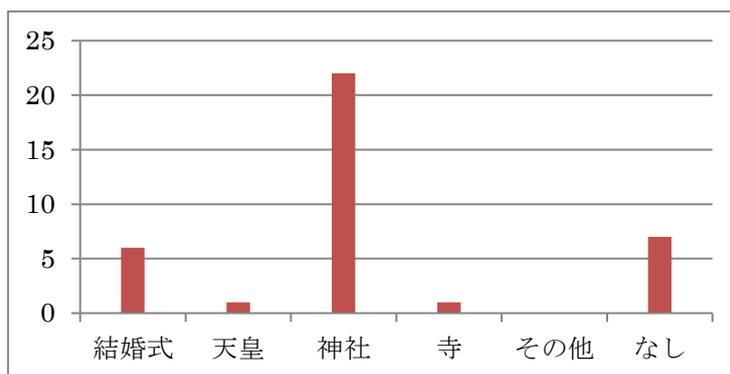


図2 問3「神道のイメージは？」の答え【多肢選択法】

#### 問4 仏教のイメージについて

問3と同じ形式の質問だが、問4では仏教のイメージについて聞いてみた。しかし、今回は若者がもっと理解していると感じた。なぜかという、大部分は寺、大仏、葬式を指示したからだ。「なし」と答えた人も、二人だけだった。実は、どのように宗教に興味を持っていなくても、若者は神道より仏教のことがなんとなく分かる気がする。問2の答えを見ても宗教について教えてもらったことがあると答えた人にもかんがみて、三人は仏教について解答したのだ。

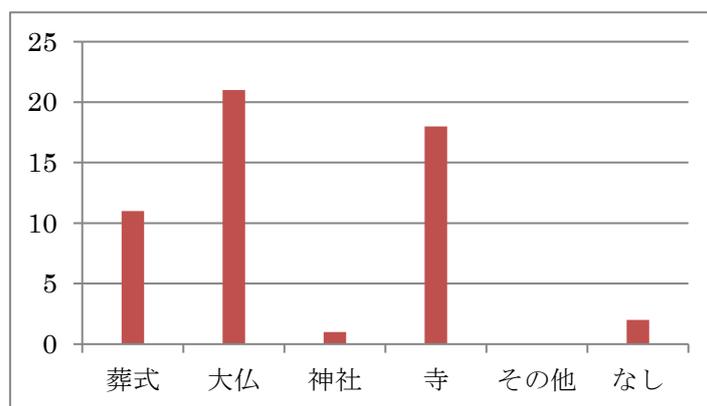


図3 問4「仏教のイメージは？」の答え【多肢選択法】

#### 問5 仏教と神道はどう違うか

問 5 は仏教と神道の違いについての質問だ。今回は選択肢がなく、自由に書かなければならないので、アンケートのもっとも答えにくい質問のかもしれない。ほぼ半分の回答者は何も書いていない、あるいは、「分からない」と答えた。答えた人も、本当にそのような違いが分かるかどうか疑問が残っている。実は、11 人が「仏か神か」と答えたが、文字通りの答えだった。「仏の教えか神の道か」と答えた人もいた。このような答えから見ると、回答者は仏教と神道の違いが分からずに、質問の中で書いてあった文字を見ながら答えてみたのではないだろうか。はっきりした答えを出してみたのは 6 人しかいなかった。この答えは、「信じる者、信じる者の数」、「仏教の方が人々に身近にあると思う」、「仏教は一神教、神道は多神教」、「仏教は寺、神道は神社」、「仏教は死んだ人というイメージがある」、「仏教：輪廻転生を基盤にしている。神道：万物の神を拝む」というものだった。

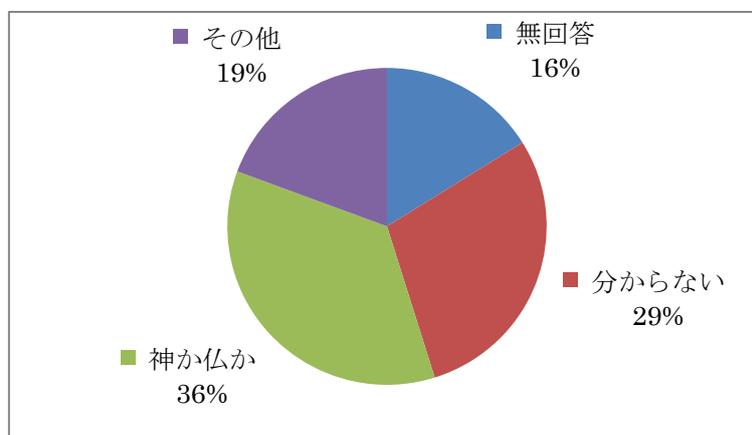


図 4 問 5 「仏教と神道はどう違うと思いますか。」の答え【選択肢なし】

#### 問 6 宗教は自己のアイデンティティに影響を与えているか

問 6 は「自己のアイデンティティ形式に特定の宗教が影響していると思いますか。」という質問だ。イタリアでは宗教がナショナルアイデンティティに影響している一方、日本ではアイデンティティへの宗教の影響がそれほど強くない気がする。実際に、たいていの回答者は「いいえ」と答えたのである。3 人だけは「はい」と答えたが、どのようなことですかと聞いてみると、その中の一人は何も回答していない。ほかの二人は「『人に迷惑をかける』などの考え方が仏教からきていること」と「宗教の中で禁止されていることや推奨されているものの影響があると思うから」と答えた。したがって、そのデータから見ると、若者にとって宗教は全くナショナルアイデンティティに影響をしていないと分かる。

#### 問 12 アンケートについての意見・感想

アンケートの終わりに、神道や仏教など、宗教についての意見やアンケートの感想があったら自由に書いてくださいと書いてあった。31 人の中で 12 人は何かを書いた。その中からもっとも興味深いのは次の 4 つだと思う。

- ・ 「神道と仏教の違いを説明するのは難しい。」
- ・ 「日本人は苦しい時や辛い時に神様や仏様を信じる傾向があると思います。」
- ・ 「アンケートを回答して、自分は宗教や信仰についてほとんど何も考えたことがなかったなと感じた。」
- ・ 「信じる、信じないは人それぞれだが、神や仏を信じることによって心が楽になったり、気持ちが落ち着くのであれば、神や仏はいなくても宗教としての目的は達成されたと考えることができる。」

この意見から見ると、様々なことが分かる。まず、やはり神道と仏教の違いについての質問は答えにくい。なぜかという、質問の形式だけでなく、宗教なら神仏習合が日本人の考え方に影響を与えているからだ。つまり、神仏習合のため、神道と仏教を一緒にしがちの日本人は多い。次に、宗教についてほとんど考えたことがないとある回答者は書いた。それは日本人の若者の中でもっとも普及している宗教に対する態度なのではないだろうか。最後に、苦しい時や試験の前など神社や寺に行く日本人もいる。すなわち、宗教の目的は欧米の宗教と異なり、神様との接触や救い、天国に昇ることなどではなく、この世で利益を得ることや心を楽にすることだと日本人の若者は思っているのではないだろうか。

アンケートの6つの質問とアンケートについての意見や感想から次のことが分かった。一般的に、日本人の若者は特定の宗教を持っていない。どころか、宗教に全く興味がない、また、ほとんど考えたことがない回答者もいた。驚いたのは、神道は日本で生まれた宗教なのに、あまり知られていないことだ。若者は神道より仏教の方が詳しいが、神道と仏教の区別があまり分からないと言える。最後に、特定の宗教が自己のアイデンティティにあまり影響していないということも理解した。

### 第三節 総務省のアンケートとの比較

アンケートの第二パートで統計数理研究所の「日本人の国民性調査」の質問を参考しながら、群馬大学生の宗教観を確認してみた。「日本人の国民性調査」は、昭和28年から5年ごとに調査を実施しており、初回から数えて60年目の平成25年に第13次調査を行った。調査は、基本的には同じ調査手法・同じ質問項目で実施している。（文化庁文化政策課、2015：54）。ただし、「日本人の国民性調査」では20歳以上の男女個人が調査対象とされているに対して、本調査では1-4年生（18歳から21歳まで）の男女個人が対象とされている。これから「日本人の国民性調査」の20歳代の回答と本調査の回答を比較する。

#### 問7 宗教を信じるか

問7は「何か信仰とか信心とかを持っていますか。」という設問に、「持っている」、「持っていない、関心がない」のどちらかを答えるものだ。本調査では30人は「持っていない、関心がない」と答え、一人しか「持っている」と回答していない。

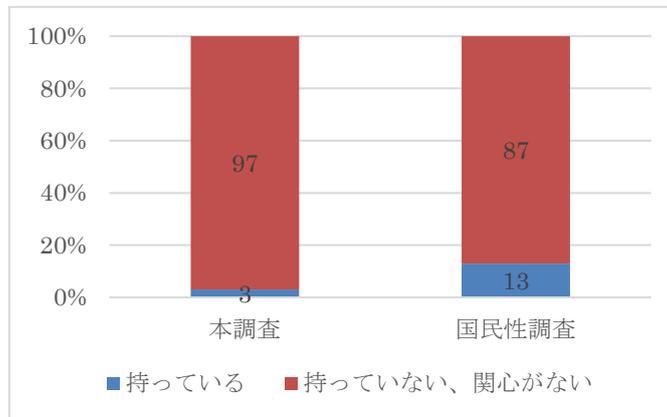


図5 問7「何か信仰とか信心とかを持っていますか。」の回答比較

図5が示すように、本調査と国民性調査の結果はほぼ同じだ。確かに、「持っている」という答えは、国民性調査の回答者の方が10ポイント高い。しかし、国民性調査の年代別のデータ（文化庁文化庁宗務課、2015：55）から見ると、年とともに「持っている」と答える回答者が増加する傾向があると分かる。本調査の対象は18-21歳、国民性調査の対象は20-29歳の若者だと考えると、そのような傾向が守られていると言える。両方の調査によると、若者が宗教を信じていない、あるいは宗教に関心がないと分かる。

#### 問8 「宗教心」は大切か

問8は「それでは、いままでの宗教にはかかわりなく、『宗教的な心』というものを、大切だと思いますか、それとも大切だとは思いませんか。」という設問に、選択肢「大切だ」、「大切でない」、「その他」の中から答えるものだ。本調査では、19人は「大切だ」、7人は「大切でない」、3人は「その他」と答えた。残っている2人は無回答だった。

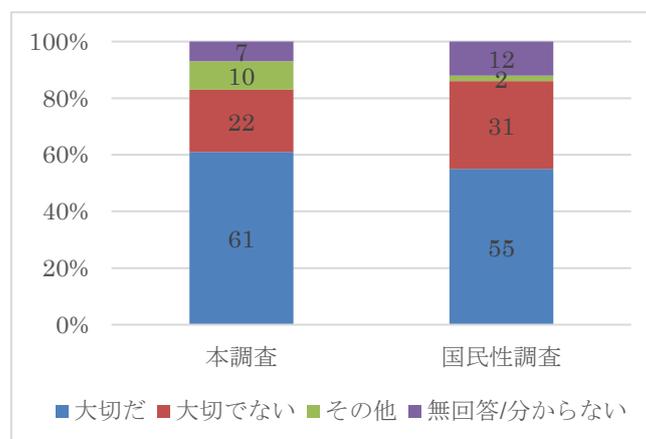


図6 問8「それでは、いままでの宗教にはかかわりなく、『宗教的な心』というものを、大切だと思いますか、それと

も大切だとは思いませんか。」の回答比較

「大切だ」という答えは、国民性調査の回答者の方が6ポイント高いが、本調査と国民性調査の間8に対する答えもほぼ同じだと言える。興味深いのは、前問「宗教を信じるか」で「信じていない」と答えた人は大部分だったが、問8で宗教心は大切だと言っている人も比較的に多い。つまり、日本人の若者は、宗教そのものをあまり信じていないにもかかわらず、宗教の存在が重要だと思える。そのような矛盾は両方の調査でも見える。

問9 「あの世」を信じるか

問9は「あの世というものを信じていますか。」という設問に、選択肢「信じる」、「どちらとも言えない」、「信じてはいない」、「その他」の中から答えるものだ。本調査では、10人は「信じる」、11人は「どちらとも言えない」、7人は「信じてはいない」と答えた。誰も「その他」と答えていない。残っている3人は無回答だった。

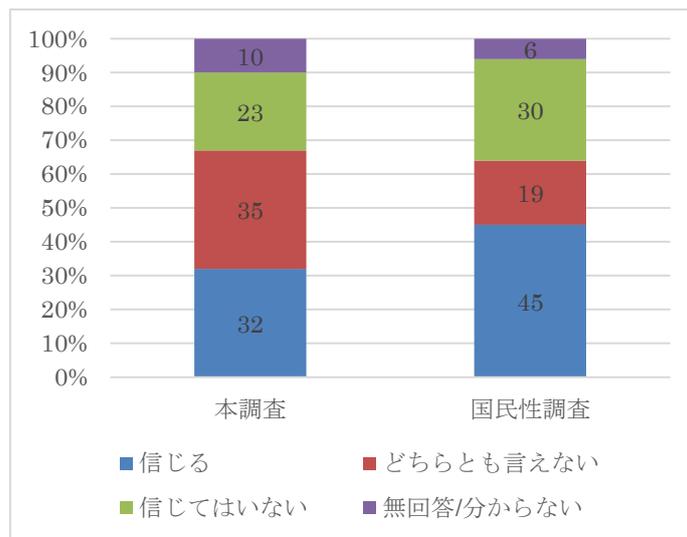


図7 問9「あの世というものを信じていますか。」の回答比較

問9なら本調査と国民性調査の回答は少し異なっている。なぜかという、と、「信じる」という答えは国民性調査の回答者の方が13ポイント高いためだ。そして、「どちらとも言えない」と無回答/「分からない」を一緒にすると、本調査では問9の45%になるが、国民性調査では25%しかにならないからだ。つまり、本調査ではほぼ半分の回答者は分からない、あるいは判断できないと言っているに対して、国民性調査ではほぼ半分の人は信じていると答えているのである。18-21歳の群馬大学生の方はあまり「あの世」というものを信じていないと言えるだろう。

## 問10 宗教か科学か

問10は「宗教というものについて、どう思いますか。次の4つの意見のうち、あなたの意見に一番近いと思うものを1つだけ選んで下さい。」という設問に、以下の選択肢から選んで答えるものだ。

- 1) 宗教というものは、人間を救うことはできない。人間を救うことのできるのは科学の進歩以外にはない（宗教否定）
- 2) 人間の救いには科学の進歩と宗教の力とが、たすけあってゆくことが必要である（宗教科学協力）
- 3) 科学の進歩と人間の救いとは関係がない。人間を救うことができるのはただ宗教の力だけである（宗教のみ）
- 4) 科学が進歩しても、宗教の力でも、人間は救われるものではない（両方否定）
- 5) その他

本調査では、2人は1番、15人は2番、9人は4番、2人は「その他」を選んだ。3番は誰も選んでいない。残っている3人は無回答だった。

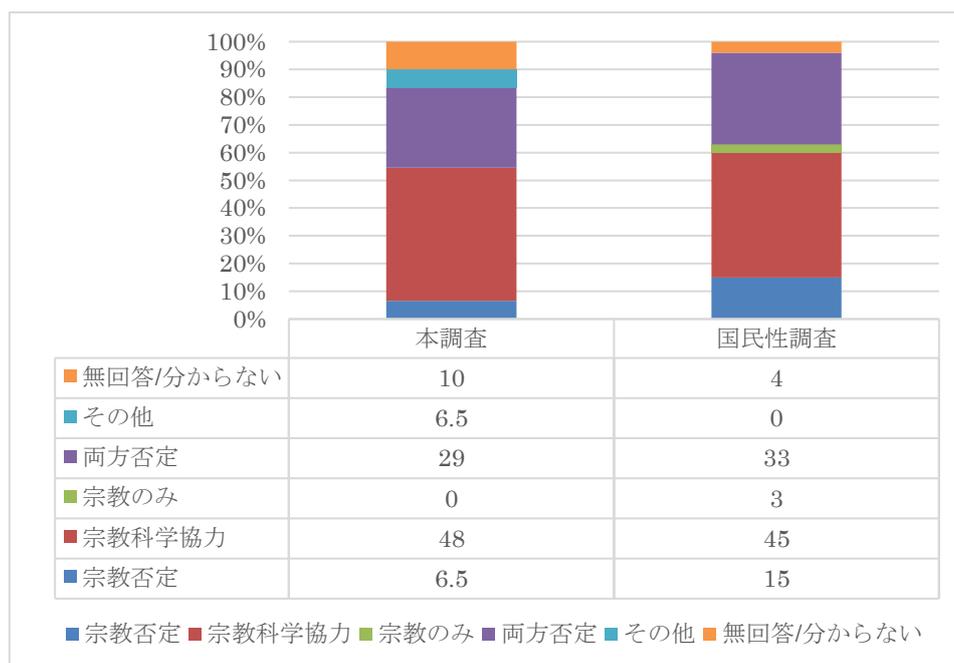


図8 問10 宗教か科学かの回答比較

二つの調査を比べると、問10のデータがよく似ていると分かる。答えは順番に「宗教科学協力」、「両方否定」、「宗教否定」になる。国民性調査では3%の回答者が「宗教のみ」を選んだが、本調査では誰も選んでいない。このデータから判断すると、日本人の若者は宗教を信じていないのに、宗教の否定をあまりしないと言える。

## 問11 先祖を尊ぶか

問 11 は「あなたはどちらかといえば、先祖を尊ぶ方ですか、それとも尊ばない方ですか。」という質問に対して、「尊ぶ方」、「ふつう」、「尊ばない方」、「その他」から回答するものだ。本調査では、7 人は「尊ぶ方」、18 人は「ふつう」、2 人は「尊ばない方」、1 人は「その他」と答えた。残っている 3 人は無回答だった。

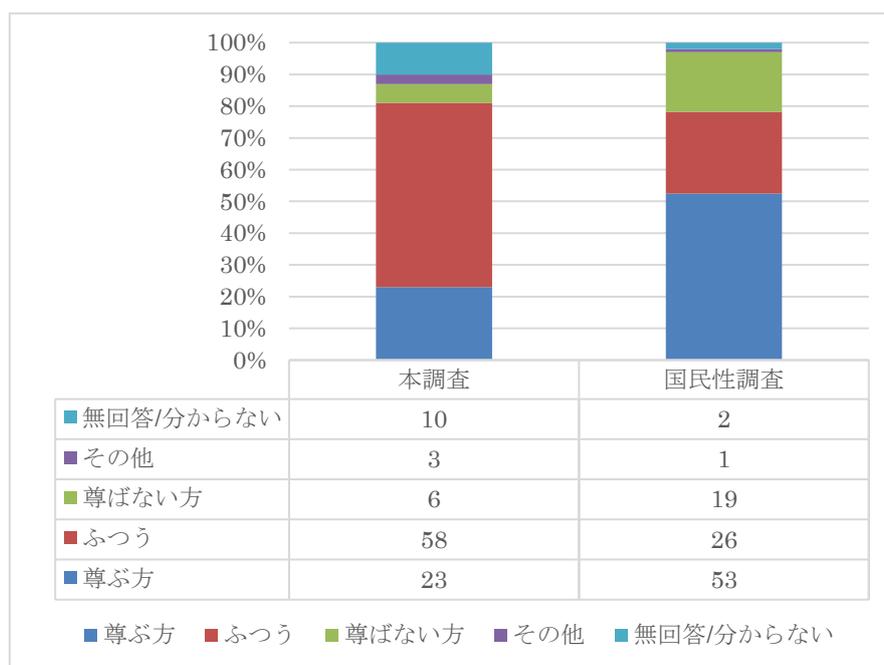


図 9 問 11 「あなたはどちらかといえば、先祖を尊ぶ方ですか、それとも尊ばない方ですか。」の回答比較

図 9 を見ると、本調査と国民性調査の問 11 の結果が全く違うと分かる。なぜかという、本調査では、ほぼ 6 割の回答者は「ふつう」を選んだのに対して、国民性調査では 50%以上の人は「尊ぶ方」と答えたからだ。つまり、群馬大学生の中では儒教の影響はそれほど強くないと言える。一方で、日本全国では、先祖を尊ばない人がほぼ 20%を示すのに儒教を守っている若者の方が多い。

## 結び

本調査の結果から見ると、宗教的な心を大事にしている人がいるにもかかわらず、一般的に日本人の若者は特定の宗教を持っていないのみならず、宗教にあまり興味がなく、仏教と日本で生まれた神道の違いも分からないと言っていい。本調査と国民性調査との比較から理解できたことといたら、群馬大学生の宗教観は日本全国の若者の宗教観と違うところもあるが、調査の回答ではほぼ同様の結果が出た。

### 第三章 なぜこのような結果が出たか

上述通りに、日本人の若者はたいてい宗教にほとんど関心がない。しかし、若者だけでなく、その若者の両親もあまり宗教に興味を持っていないといっても過言ではない。なぜかといえば、本調査から判断すると、若者は家族の中でも宗教について何も教えてもらったことがないと言っているからだ。しかし、なぜ日本人はそれほど宗教に興味がないのだろうか。第三章で二つの理由を挙げてみる。

#### 第一節 歴史の視点から

ヨーロッパでは宗教が何回も戦争の元になったと日本でもよく知られているのかもしれないが、日本では宗教と戦争はあまり関係がないと感ぜられるのではないだろうか。つまり、ヨーロッパ（特に、イタリア）では宗教はナショナルアイデンティティの一つだと思われ、文化や政治までに影響を与えている。一方で、本調査から見ると、日本の若者は仏教や神道などが自己のアイデンティティにあまり影響していないと言っている。

しかし、日本にも宗教が政治に大きな影響を与えた時期がある。それは国家神道のころである。国家神道とは明治維新後、天皇統治体制のもとに、国家によって形成され、振興された国民宗教のことだ。神道的な実践を国教として、天皇の神格性を主張するという意味だ。このイデオロギーのため、神仏分離も実施された。しかし、戦後から国家神道がなくなって、日本人のナショナルアイデンティティに影響を与えなくなったので、神道に対する興味もなくなってきたのではないだろうか。つまり、神道は第二次世界大戦のころとつながりがあるからこそ、現在の人々はそれに対してあまり関心を持っていないと言えるだろう。

だが、神道だけでなく、他の宗教にも現在の日本人はほとんど興味がない。それはなぜだろうか。実は、現在のテロや、日本の場合、1995年のオウム真理教が起こした地下鉄サリン事件などが宗教的な原理主義の危険や宗教の暗い面を示したのである。宗教が社会に大きな影響を与えているイタリアでは、こうした恐怖のためカトリックを信仰している人が逆に増えていると感ぜられている。それは、カトリックがイタリア人のナショナルアイデンティティの一つだからだ。一方で、宗教がそれほど重要な社会的役割を果たしていない日本では、全ての宗教を遠ざける人が増えてきたのではないだろうかと思う。

#### 第二節 神仏習合の視点から

神仏習合の考えも日本人が宗教に関心を持っていない理由とつながりがあるだろう。第一章で説明したように、本来の神道は日本土着の信仰であり、神が氏や村と結びついているので閉鎖的な信仰に対して、6世紀に日本に伝来した仏教はもっと伝統があり、普遍宗教

だった。その違いにもかかわらず、仏教が奈良時代以降神の観念に影響を与えたので、神仏関係は緊密化し、平安時代には神前読経や神宮寺が広がった。このような神仏習合は明治維新まで普及していたが、国家神道のため神仏分離が実施されたので、神仏習合の考えは抑圧された。

しかし、現在は神仏習合の実践はもう一度普及しているのではないだろうか。なぜかという、本調査の感想から見ても、日本人は苦しいときや願いがあるときなど神社か寺どちらでも祈る傾向があるからだ。こうした神仏習合の考え方があるからこそ、日本人はあまり宗教に興味を持っていないと言えるだろう。つまり、神道と仏教の矛盾を無視し、同時に二つの宗教を信仰することができるという神仏習合のため、日本人が宗教と宗教を区別する必要があまりないと思う。ある回答者が書いたように、神道と仏教の違いが分からなくても、神社や寺へ行って心が楽になったら、宗教としての目的は達成されている。

おわりに

本稿では、アンケート調査を実施しながら、日本人の若者の宗教観について参考した。つまり、日本人の若者がどのように比較的複雑な日本の宗教状況に取り組むかという問題提起に答えてみた。その結果、若者があまり宗教に関心を持っていないだけでなく、宗教について考えたこともなく、ほとんど何も知らないということが分かった。

#### 参考文献

エアハート、H・バイロン（1994）『日本宗教の世界—一つの聖なる道—』（福田重精・新田均訳）朱鷺書房

Ellwood, Robert (2008), *Introducing Japanese Religion*, Routledge

文化庁文化部宗務課（2015）「宗教関連統計に関する資料集」

文化庁文化部宗務課（2012）「宗教統計調査」